

北海道林業試験場

野幌國有林内の動物調査書

北海道林業試験場

野幌國有林内の動物調査書

本報告は北海道廳嘱託北海道帝國大學教授
農學博士犬飼哲夫をして調査せしめたる結
果にして参考に資するものあるを以て茲に
印刷に附す

昭和九年七月

北海道林業試験場

野幌國有林内の動物調査書

目 次

| | |
|----------------------|----|
| 緒論 | 1 |
| 應用動物學上から見た野幌國有林の意義 | 2 |
| 魚類 | 3 |
| 兩棲類 | 5 |
| 爬蟲類 | 6 |
| 哺乳動物(獸類) | 7 |
| 鳥類 | 11 |
| 野幌國有林内及びその附近に於ける鳥類目録 | 15 |
| 鳥類繁殖状況 | 22 |
| 林内に於ける巣箱 | 32 |
| 和名索引 | 35 |
| 學名索引 | 38 |

野幌國有林内の動物調査書

緒論

北海道の開拓は既に六十餘年の歴史を経し千古斧鉄の跡を見なかつた全道を蔽つてゐた、鬱蒼たる大森林は薙ぎ倒す如くに伐り開かれて、山岳地方を除いては昔の北海道を偲ばしむる原始林は殆ど現今では見られなくなつた。斯かる時に開墾の濫觴の地であり、且最も進歩した石狩平原の一部に野幌國有林が原始林を併せ存在することは、各方面に於ける林業の基本試験を最も徹底せしむることは言を俟たないが、森林動物の研究にも最も便宜且效果的である。現時森林有害動物の駆除に歐米各國が著しく目覺め或は人工的に或は天敵利用法を併用して研究が着々進められ、産業の興振を講じつゝあり、この時に野幌國有林の如き廣大なる森林を有し、凡ゆる研究の機會を提供してゐることは誠に邦家産業の爲め有意義なことである。余は今回林務課長、新島前林業試験場長、石原現試験場長並びに原田技師等の御厚意と御援助により、未だ研究充分ならざる野幌國有林内の動物を調査し得たことは甚だ感謝に堪へない。茲に上記諸氏に萬腔の謝意を表し併せて種々御便宜を賜つた場員諸氏、及び北大動物學教室助手武笠及び佐藤兩學士にも謝するものである。殊に同教室池田眞次郎君が鳥類の大部分の観察に當つたことは筆者の甚だ感謝に堪へないところである。

然し乍ら野幌國有林は目下禁獵區である關係上調査充分ならざるものあり、従つて動物生態學的調査に偏重する傾向があるのは、止むを得ないことである。又次に本調査の本格的着手は昭和九年三月以降のことであるから、以前に着目してゐた事實に、諸氏の調査を參照して茲にその一部を發表し他日の完成を期するものである。

昭和九年六月

犬飼哲夫

應用動物學上から見た野幌國有林の意義

世界各國に於て人口の増加と文明の進歩に伴ひ未開の地は忽ちに豊饒な耕地となり、或は化して総日日光を仰ぎ得ない工場地となり、天然の風光は日を逐ふてその全貌を變へつゝある現今、人間はその本性が楽しむ自然を奪はれた寂寥を感じ、同時に自ら原始の面影に著しい愛着心を持つ様になつて來た。斯かる方面から見ても呵責ない文化の風潮を堪き止める可き保護された自然設備は甚だ有意義なことである。然し乍ら一面に於いて急激に發達した物質文明の極と、限りなき資源の開發は直に農林業に於いては害蟲の勃頭、病菌の跋扈となり收拾すべからざる憮ましい姿となつて、自ら仇なす一大恐慌を醸す状態が各地に出現してゐるのである。これ皆人爲を以て不調和に破られた自然界の均衡の痛ましい殘骸である。これが爲め北海道の夏を見舞つた僅かな寒冷は過去に於いて全道の大凶作を惹起し、然らざる時でも或は水稻の泥負蟲と云ひ、甜菜の夜盜蟲、褐斑病、亞麻の立枯病、植林地の野鼠等、これが對策のため往々産業興振策は即ちこれ等害敵との爭闘に終るの徒勞を取てしなければならない。米國ニュージャーイー洲の一角に現はれた取るに足らなかつた豆コガネは數年間に於て既に近隣の各洲に蔓延し遂には如何なる草木をも食害し、今や全米を擧げての恐慌を起してゐることは決して對岸の火災視出來ないことで、茲に於てか自然界夫自身の根本的研究は、一見甚だ積極的に見へる産業施設よりも屢々重要性を帶びてゐることは現實が指示してゐる事實である。

野幌に於ける國有林は多分に原始林を混入して、本道林業上の各種の重要な根本研究に備へてゐるのであるが、一般に保護林は野生有益鳥類の誘致繁殖惹いては有害動物驅除に最も有效であることは既に諸外國に於ても實證されたことで、更に進んで野生鳥類に人工巣箱を與へ或は人工給餌をして積極的保護をなし、效果を大にしたことは、幾多の實驗が示すところで、この點からも本國有林はこの方面的研究を徹底せしむるものである。

斯くの如く保護林の設置は一般に各國の産業發達に必要なことは明白であるが、北海道は氣候風土が特殊状態にあり別してその必要を痛感するのである。即ち歴史が物語る如く嘗てはアイヌ狩獵の地であつた鳥の國、動物の地であつた北海道が斯くも慨しく昔の面影を失つたのはこの關係で、これ冬期に於ける嚴寒と積雪の致すところである。獸類は深い積雪により行動の自由を缺き且その足跡により容易く追撃される。冬期に於ては如何なる深山溪谷も獵師にとつては平坦な野と化し、貂、狼、鹿等の重要狩獵獸は瞬く間に絶滅に頻した。鳥の中のエゾヤマドリの如きも同じ運命にある。この特別な状態に於ては普通の保護法によつては野生動物の保護の完全を期することは出來ない。

い。野幌國有林の存在はこの意味から見ても重要である。他方に於て、有害獸の野兎、野鼠の食害も多く積雪期に起り、他の地方とは又異つた状態にあり特殊研究を要し色々の意味で本國有林の與へる恩恵は決して少くない。

因に野幌國有林の地勢概況を記せば總面積は 3426,630 ヘクターで内 320,520 ヘクターが天然記念物として三箇所に分れて存在してゐる。江別町及び廣島村の二箇町村に跨り、一部は原野に接し大部分は農耕地に包围され、中央に南北に縱走する低き丘陵をなす分水嶺があり、溪流を分派してゐる。林縁に近く東側に灌漑用として貯水池が數箇ある。針葉樹多く主としてトドマツで闊葉樹が混淆してゐる。概して云へば高乾の地に針葉樹、低湿地に闊葉樹が多い。下地にはチマキザサ、ネマガリザサの密生してゐる所が多い。他の下草は比較的少い。然し湿地には身を没するものが密生してゐる。冬期嚴寒の頃と雖も密林をなす故に林内は平溫で多數の動物の好避難地となるのである。

以下記するところに於ては専ら脊椎動物の主なるものに就き、今迄になした生態的觀察を述べようと思ふ。

魚類

野幌國有林中に源を發する溪流は數多いが何れも小川に過ぎない。近年附近の農耕地の灌漑用として、數箇所に豊富な水量を有する貯水池が設けられたが、夏期は殆ど枯渇する迄水を利用するから、概して云へば魚属の棲息に適するところが少い。種類も少く次の様な數種を採集し得たのみである。

スナヤツメ *Lampetra mitsukurii* Hatta



1. スナヤツメの溯る大澤の川この附近には常にアカシヨウビンが棲息する

春四、五月には國有林中の小川に多數に群つて溯行して来るヤツメで、長さは20センチ位のものが多い。清流の砂地を撰んで雌雄相集つて產卵し孵化した幼魚は始め砂泥中に潜みそのまま越年することもある。その產卵期頃國有林に棲む鳥類のアカシヨウビン等は多數のヤツメを食してゐる。本邦では到るところの溪流に見られるヤツメである。



2. スナヤツメの雌(半大)

エゾドヂヨオ *Lefua nikkonis* (Jordan & Fowler)

4センチ位の小形の泥鰌で數は少い日本々上のホトケドヂヨオの一種である。鬚は8本ある。

3. エゾドヂヨオ
(實物大)**フクドヂヨオ** *Oreias oreas* (Jordan & Fowler)

大形の泥鰌で大なるものは15センチ位に達する。北海道及び樺太の河川に極めて多い。鬚は6本。



4. フクドヂヨオ(全大)

フナ *Carassius auratus* (L.)

石狩平原到るところの淡水に多く棲息する。野幌國有林内の河及び貯水池にも居るが餘り多くはない。

イトヨ *Gasterosteus aculeatus aculeatus* (L.)

5. イトヨ(半大)

大きさ8センチに達する脊面に二本の長い棘を有するトゲウオで四月上旬に群をなして、河川に海から溯り沼等の浅所又は流水の緩徐な所に營巢産卵し、産卵後は雌雄共斃死する。昭和八年四月上旬には近村の廣島村等では小川はこの魚で充満

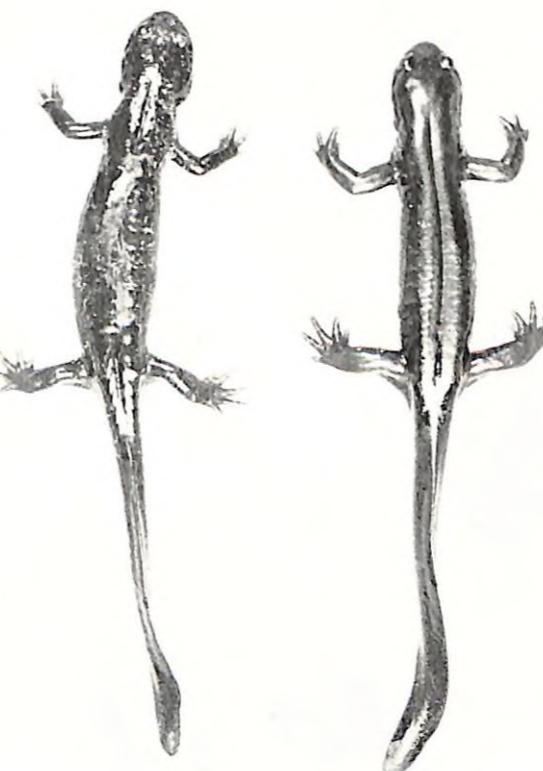
する奇觀を呈し、村民は捕へて乾燥し鶴の餌料となしたことがある。

エゾトミヨ *Pungitius tymensis* (Nikolsky)

イバラトミヨと共にこの附近の河川、池沼に棲む小形のトゲウオで短小な脊棘が8—13本有り、流水の緩かなところに春營巢して産卵する。

兩 樓 類

函館附近に産するヒキガヘルを除けば北海道内に棲息する兩樓類は皆野幌國有林中に居る。即ち次の三種である。

エゾサンセウウオ *Hynobius retardatus* Dunn

6. エゾサンセウウオの雌(左)雄(右) (半大)

北海道内に棲む山椒魚の一種で體長は14センチ位で、平地にも高山の上にも到るところで發見される。春の融雪後直に冬眠から覺めて、薄氷の張る頃でも森林中の水溜り、道路側の溝等に集り2本の長い太紐状の卵囊に包まれた卵を産む、然し流れの速い河川等には産卵することはない。卵は一ヶ月位でオタマジヤクシになり卵囊から脱け出て自由に泳ぎ廻り秋には變態を終り、小さい山椒魚となつて水邊を離れて森林中に四散する。稀にはオタマジヤクシの儘、越年するものもある。山椒魚の食物は昆蟲類、ミズ等の小動物で、日中は日蔭に隠れ、雨の日や夜中出て食を漁り、又よく土中にも潜行し耕作中に土の中から得られることがある。野幌國有林中には他に比較して、この山椒魚が割合に多い。



7. エゾサンセウウチの卵塊



8. エゾサンセウウチ、蛙の産卵する森林中の水溜

エリアカガヘル *Rana temporaria* L.

北海道、樺太、沿海洲に廣く分布してゐる赤蛙で、春、エゾサンセウウチより稍々後れて、同じ様な水溜りに産卵する。卵塊は巻大に一塊をなし、オタマジヤクシは七月下旬には變態を終り小さい蛙となつて水邊を去る。森林中到るところに棲息し、草原や農耕地にも少くない。アカガヘルの食物は悉く生活中の小動物で、夜盜蟲等の昆蟲類が主として食せられる。一匹の蛙は一年に400匹以上の昆蟲を食つて生活してゐる有益動物である。（札幌農林學會報大正十四年七十號大飼、蛙の食性報告参照）

アマガヘル *Hyla arborea japonica* Guenther

アマガヘルは林中にも棲息するが、主として林縁に近い溜水や水田に五月中旬頃から現はれ七月上旬迄長い期間に亘り産卵をなす。この蛙は周囲の色彩に依つて自己の體色を變じて潜み、多くの昆蟲を食する有益動物である。

爬蟲類

爬蟲類は兩棲類と等しく何れも食肉性で、森林の害蟲の驅除を助ける。又、蛇類は野鼠の天敵である。

カナヘビ *Takydromus tachydromoides* (Schlegel)

褐色の尾の長いトカゲで國有林中では稍々乾燥した日當りのよい箇所に棲息してゐる。五月に交尾し、落葉の下、草の根本等に産卵し七月に孵化する。數は餘り多くない。

トカゲ *Eumeces latiscutatus* (Hallowell)

幼體は特に毒々しい青色を帶びたトカゲで本國有林には稀に見得るのみである。

アヲダイシヤウ *Elaphe climacophora* (Boie)

野幌國有林中何處にも棲息する爬蟲類中最も多い種類で屢々大形のものがあり長さ2米に達し、木に攀じて小鳥の巣を襲ひ或は昆蟲を食ひ又好んで野鼠を食ふ。然し蛇の食ふ野鼠の數は元來が冷血動物で生活力が鈍いから肉食獸、猛禽類に比較すると遙かに少い。

シマヘビ *Elaphe quadrivirgata* (Boie)

アヲダイシヤウより稍々小形の長さ1米内外の蛇で、脊面には褐色の地色に4條の黒褐色の縦線がある。性質は敏捷である。野幌には前種に比較して少い。この黒色の變種は一名カラスヘビとも云ふ。

チムグリ *Elaphe conspicillata* (Boie)

脊面は赤褐色で俗名アカヘビと稱し、好んで土中に潜行して昆蟲、ミズ、野鼠を食ふ。殆どシマヘビと同大である。稀に發見される丈である。

マムシ *Ancistrodon blomhoffii* (Boie)

北海道に產する唯一の毒蛇であるけれども野幌國有林中には極めて少い。

哺乳動物（獸類）

昔狩猟平野に多數に棲息してゐた鹿、貂、獺、狼等の中で既に絶滅した狼、又現在では中央高地・日高山脈等にしか居ない前記三種は勿論野幌には棲息しない。熊は往々別官林に姿を現はし、又昭和五年から三ヶ年ばかり續けて毎年五月頃31林班から東三號線邊を徘徊してゐたが現在は見ない。その他の獸類は國有林の周囲が開墾地である故か森林の割合に種類も數も少い。獸類の中には勿論有害な野鼠も含有するが、北海道内各地で驅逐された動物が此處を最後の避難所としてゐる感があるから、徹底的保護により稍々現在よりも重要な種類は増加し得ると思ふ。この森林に棲む獸類を

擧ければ次の如きものがある。

1. エリヤチネズミ *Clethrionomys rufocanus bedfordiae* Thomas



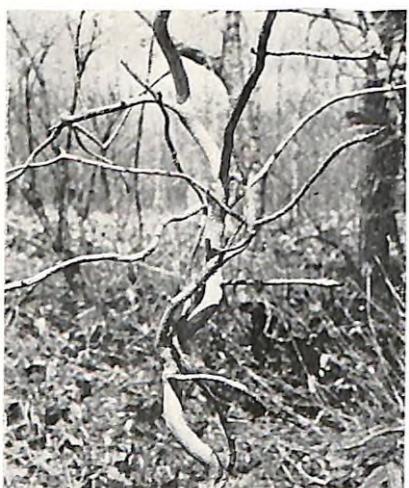
9. 林外の燕麥畑に残るヤチネズミの通路

頭部が比較的圓味を有し體長10センチ尾は短く約體長の半分で、背面は黒褐色の鼠で草原地、牧草地、畠地、箇原等に住み土中にトンネルを穿ち、積雪の下にても草木の根を食害する。草原地では雪の下で草の根を食ひつゝ通路を作つて進行し融雪後にそのトンネルを到る處に發見する。然し概して大木の繁茂する森林中に棲息するものは少い。

2. ハツカネズミ *Mus molossinus* Temminck

野外では好んで種子を食ひ、小動物も食ふことがあり、冬期は人家に入つて家鼠となる。

3. エリヒメネズミ *Apodemus geisha hokkaidi* Thomas



10. 雪中にヒメネズミの樹皮を食害した跡

國有林中の草原、箇原又は農耕地に棲む廿日鼠大の尾が體長よりも長い鼠で、冬期には屢々雪の中から表面に出で來り、長い尾を巧みに捲みて倒木に登りて樹皮を食ひ、或は細い灌木に攀じてその實を食ふこともある。又生木の木皮、種子をも食ふ有害動物で人家に入ることもある。往々群をなして移行することがある。

4. ドフネズミ

Rattus norvegicus Erxleben

家鼠として人家にも巢食ふ大形の鼠である。野外にあつては他の野鼠の様に大舉して食害するとはないが、性獰猛で殆ど肉食獸に等しい習性を有する。河川中に潜つて魚類を食ふことがあるかと思へば、野鳥の巣を襲撃して、卵や雛を食ひ、且農家の鶴舎に入り一時に多數の雛を食ひ荒すこ

とは屢々見られる。野幌國有林中では小川の邊でよくこの鼠に出會する。

5. エリス *Sciurus*

vulgaris orientalis Thomas

北海道の深山にはこの栗鼠は未だ相當に多く棲息するが、石狩地方には非常に少い。國有林中では近年になつて稍々屢々發見されるから増殖してゐることと思はれる。灰黒色の愛らしい動物で時々林道に出て来る。食物は種子、果實、穀果、木の葉、芽等であるが森林の害になる程ではない。



11. 雪中のリスの足跡

6. エリモモンガ *Sciuropterus russicus orii* Kuroda

體長15センチ位の小形のモモンガで俗にバンドリと云ふ。野幌國有林中には北海道内の各地に比べて特に多數に棲んでゐる。その毛皮は殆ど利用價値がないため、餘り捕獲されなかつたから道内には未だ相當に多い。食物は種子、果實、木の芽等であるが有害とはならない。冬期中は國有林中に架設した鳥の人工巣箱に入るもののが可成り多く、又春この巣箱中で巣を營み仔を産することもある。林内では猛禽類や肉食動物の好餌食となり四季を通じてよくその殘骸を發見する。



7. エゾノウサギ

Lepus ainu Barrett-Hamilton

北海道内の原野、山岳、森林と何處にも多數に居る兎である。夏期は褐色で冬期は耳先に黒斑を残して、白化する。この兎は夏期には各種の草木を食してゐるが冬期積雪の候になると山岳地方では好んで箇の青葉を食ひ、ガンビ、タラノキ等の細枝を食つてゐるが雪の上を自由に走り、植林地に出て落葉松の枝を噛み切り且幼樹を食ひ、樹皮を剥ぎ取り枯死せしめ大害を見るにこれが少くない。その上夜間民家附近に現れ各種の果樹を食害し野鼠に劣らない有害獸である。

12. エゾノウサギの雪上の足跡

8. エリトガリネズミ *Sorex shinto saevus* Thomas

體長7センチ位で尾は體長より短い所謂モグラと稱せられるものである。食蟲類に屬する動物であるから、多數の昆蟲その他の小動物を食ひ有益である。性は懶惰で冬期は野鼠の坑道に入りよくこれを覗して食ふ。多く野鼠の穴等を利用して地中に棲み、夜出て食を漁り、往々人家に入ることがある。

9. キツネ *Vulpes japonicus* Gray

野幌國有林中には雪の上の足跡や食物の残骸、糞等により少數棲息して居ることを知る。野鼠、小鳥、昆蟲その他の小動物を食用とし、多數に住めば野鼠の天敵として有效であるが毛皮獸として捕獲されるので、北海道内には非常に少くなつた。



13. 狐が夜出て食ひ残したヤマシヤの羽毛、嘴、脚等



14. ヤマシヤの残骸のあつた附近

10. エゾタヌキ *Nyctereutes albus* Beard

俗に北海道内でムヂナと稱する動物で、果實等の植物性食物を攝取するが昆蟲、カタツムリ等の小動物、鼠、小鳥等も食ふ。近年この毛皮が著しく高價を唱へ旺に捕獲されて非常に少くなつた。冬は岩窟、木の洞穴等を利用して棲息し秋晩く籠居し春早く出て歩くため雪の上に残した足跡を追跡されたり隠家より外に出て脱糞するため容易く捕へられる。特に犬を利用する場合發見が容易で、銃器なくして簡単に獲られる。野幌國有林内には以前は多數に棲息してゐたが、今は僅に天然記念物たる原始林に居るのみである。

11. イタチ *Mustela itatsi itatsi* Temminck

イタチは六十年ばかり前に本土から偶然北海道に移入されたものであるから、野幌地方に始めて

現はれたのは大正三、四年頃である。イタチの習性として川筋を歩き、歩道、線路等をも往復するから、國有林内でも夏冬共澤の中や歩道にはイタチの足跡がある。小動物の昆蟲、ミズ、蛙等を食するが、野鼠の著しい天敵であることは農林省図書岸田久吉氏の研究及び犬飼の研究報告によつても明かである。冬期は人家或は暖い物蔭に簡単な巣を作り日中はそこに潜んでゐる。北海道内ではイタチを除いては有力な野鼠の天敵は外にない。



15. 林内歩道を歩いたイタチの跡



16. 夏冬イタチ類の足跡の絶はない大澤

12. エゾイタチ 13. 及びコエゾイタチ *Mustela erminea kanei* (Baird) 及び *Mustela rixosa namiyei* Kuroda

何れも冬期は白化するイタチの種類で、肉食獸で害蟲、野鼠の驅除には有力であるが數は少い。前者は夏冬長い尾を有しその先は黒色であるが後者は尾は非常に短く體色と變りない。

鳥類

野幌國有林内に棲息する最も顯著な動物は鳥類である。山田農學士は嘗て昭和六年四月から九月迄林内の鳥類を調査したことがある。余は昭和八年八月より調査を開始し現在も引き続き調査中であるが、本年六月迄に得た結果に山田學士の研究を參照して此處に報告しようと思ふ。

野幌國有林に居る鳥類は大體に於て札幌附近に棲む鳥類と異なることがないことは言ふ迄もないが、種類の豊富なこと及び數の多いことは他に比



17. 融雪期にアザサ、ヒタキ、マヒラ、マシコ等の小鳥が求餌及び水浴に集るところ



18. 各種の水禽の集る林内の水溜り

類を見ない。夏期の繁殖期にはこの森林は宛も附近の鳥類を悉く集めた動物園の感がある。これこの國有林が廣漠たる石狩平原中の唯一の常緑林であり、廣い農耕地に囲まれてゐること、禁獵區で鳥類安住の地であることに因ることは明かである。山田學士は62種の鳥類を見て居るし、余も又今迄に主として林内歩道及び澤を中心にして観察した結果のみで13目、26科、73種の鳥類が棲息することを確め、猶多數の種類をも發見し得る豫定

である。鳥類の季節的消長は未だ發表の域に達してゐないが、四季を通じて、林相により棲む鳥の種類が定ることは殆どない。概して言へば鳥類は林内一様に分布して何處にも見られる。但し一般にカラ科の鳥は、針葉樹林に集り、雁鴨目は貯水池及び澤に棲み、燕雀目の中には雲雀の如く畠地に又、オホヨシキリの如く林外の村落近くの濕地に居る等數種が農耕地に限られてゐる。一年を通じてカラ科、啄木科、鳩科等の鳥が多く、繁殖期



19. 水禽類の集り繁殖する貯水池

には種々な鳥が林内一面に營巢育雛してゐる。是等の鳥類によつて捕食せられる森林及農作物の害蟲は恐らく夥しい數に上るであらう。

野幌國有林は既述の如く、原始的古林に富むを以て各種の鳥類の繁殖地となり、又林内に不凍水あり、夏期に於ては特に野鳥の求水及び水浴に適する大小の水溜りを生じ鳥類誘致に對して天恵の地である。

近時設けられた貯水池には、附近の狩獵地から

脱れて集る水禽が多く、春秋の渡りの頃は寧ろ壯觀を呈する、主なる水禽は本春はコガモ、マガモ、オシドリ、アイサ、カツブリ等であつた。

鳥類は繁殖期に於ては普通植物性食物のものも食蟲性となり、農林省の研究報告に依れば、雀で



20. 同所に群る水禽

さへ總體的に見て有益鳥類の中に入ることが明かにされたのであるが、元來が食蟲性の鳥類でも多少は種子、穀物等を啄むものである。例へば椋鳥が果實を食ひ、シジュウカラの食餌の12%は松の實であることは小島俊文氏の研究によつて示された。この外、國有林内には多數に植物性食物を攝取するマヒワ、カハラヒワ等が棲息するから、播種期には特別に鳥類に對する防衛設備を要する。林業試験場はこのため樹枝或は金網を用ひて、種



21. 種子及び幼樹を保護する金網

子の保護をなしてゐる。

又林内より農耕地に出て作物を食害する主なる鳥類は秋期に貯水池で繁殖し、又他より集つた鳴の類で水田を荒し毎年國有林小作人からその捕獲申請をなしてゐる。收穫期に於けるハシボソガラス、カケスの食害も相當にあり、往々是等の鳥類は鷹類と共に農家の家禽をも襲ひ、又林内に多數に繁殖してゐるキヂバトは近村に出て畠地を荒し播種期には大害を見ることがある。



22. 秋から冬にかけてカケスに啄まれた玉蜀黍

然しこれとは反対に林内より農耕地に出て害蟲を食ふ鳥は無數で、繁殖期以外例へば冬期に於ても啄木の如く林外に活動するものが少くない。

所謂冬の留鳥として二月、三月中に林内で實見した鳥類も相當多數に上り、セグロセキレイ、シメ、ムクドリ、マヒワ、ツグミ、エゾアカゲラ、エゾコゲラ、クマゲラ、ヤマゲラ、エゾオホアカゲラ、シジュウカラ、シロハラゴジユウカラ、コガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シマエナガ、ミソサザイ、エゾヒヨドリ、ツグミ、スズメ、アトリ、ミヤマカケス、ハシブトガラス、ハシボソガラス、キジバト、エゾライテフ、トビ等で、種類は不明であるがフクロフの類がある。植物性食物と見られるアトリ、ヒワ等はカツラ、白樺等の闊葉樹の芽や、樹木の種子を食ふ。



23. ヤマゲラ、アカゲラ、コガラ、シジュウカラ等の林外求餌地



24. 農耕地の切株に食を求むるエゾオホアカゲラ

間であつて、その頃又最も多數の鳥の鳴叫するのを聞く。トラツグミ等は夜中にも鳴く。

野幌國有林が以上の様に鳥類の樂園の如くであるが、これを中心として周囲の林にも又比較的多數の鳥類が棲息してゐる。例へば鐵道防風林の中

でさへ（落葉松とドイツタウヒの混生林で下草はチマキザサ、ネマガリザサ）アヲヂ、ホホジロ、アカハラ、キジバト等が繁殖してゐる。



25. 留鳥や早い渡鳥の食を求めて集まる林内道路

是等の鳥類は寒氣と吹雪を避けて此處に集まるもので、何れも林縁近くに棲む傾向があり、融雪を待つて林外の農耕地、道路に集り、或は林内の馬道に出て食を漁る。この時馬糞等にも多數に集まるのを見ることがある。

一年を通じて林内で鳥類が最も多數現はれるのは未明から午前九時頃迄と、日没直前一時間位の

野幌國有林内及びその附近に於ける鳥類目録

この種類の同定は双眼鏡等により観察したものと、附近で採集されたものを対照してなしたのである。

燕雀目 Passeres

鶲科 Corvidae

ハシボソガラス *Corvus corone corone* Linnaeus

四季を通じて棲息、少數、雑食性。

エゾハシブトガラス *C. coronoides japonensis* Bonaparte

四季棲息、極めて少數、悪食性。

ミヤマカケス *Garrulus glandarius pallidifrons* Kuroda

四季棲息、多數、主として植物性食なれども、他鳥の卵及び雛を襲ふ。

椋鳥科 Sturnidae

ムクドリ *Spodiopsar cineraceus* (Temminck)

四月—十一月、多數、越冬するものがある。昆蟲を食ふ益鳥。

コムクドリ *Sturnia philippensis* (Forster)

四月—九月、ムクドリより少數、昆蟲を食ふが、果實も食ふ。

雀科 Fringillidae

シメ *Coccothraustes coccothraustes japonicus* Temminck & Schlegel

四月下旬、少數、夏期は昆蟲を食するが、穀物、種子、木の新芽を啄む。

イカル *Eophona personata personata* (Temminck & Schlegel)

六月—十月、少數、主として穀物、種子、木の芽等を食ふ。

オホカハラヒワ *Chloris sinica kawarahiba* Temminck

三月—十月、稍多數、植物性食物。

マヒワ *Carduelis spinus* (Linnaeus)

三月—十一月、冬期でも群棲するものあり、種子及穀物、木の新芽を食ふ。

ペニマシコ *Uragus sibiricus sanguinolentus* (Temminck & Schlegel)

四月中旬に少數を見る。草の實、種子、蕾、芽を食ふ。

ウツツソ *Purhula pyrrhura griseiventris* Lafresnaye

十月中旬に特に多數群る。種子及穀物食。

イスカ *Loxia curvirostra japonica* Ridgway

五月中旬に群棲するのを観察、種子及穀物食。

アトリ *Fringilla montifringilla* Linnaeus

二月及十月に小群を見る。松の實、種子、木の新芽を食ふ。

スズメ *Passer montanus saturatus* Stejneger

四季棲息、主として林縁に棲む。種子及穀物食。

アラジ *Emberiza spodocephala personata* Temminck

四月中旬に現はる。多數、夏期繁殖期以外は90%植物性食物。

ホホジロ *Emberiza cioides ciopsis* Bonaparte

四月中旬に見る。少數、主として昆蟲を食ふ。

ホホアカ *Emberiza fucata fucata* Pallas

五月上旬に見る。稍多數、夏期は昆蟲なるも草實、穀物をも食ふ。

雲雀科 Alaudidae

ヒバリ *Alauda arvensis japonica* Temminck & Schlegel

四月積雪ある時より十月中旬迄林縁に棲息。多數、昆蟲及雜草の種子を食ふ。

雀鶴科 Motacillidae

ビンズイ *Anthus hodgsoni berezowskii* Sarudny

四月下旬—十月中旬、少數、主として昆蟲、クモ類、僅かに種子を食ふ。

ハクセキレイ *Motacilla alba lugens* Kittlitz

三月下旬—十月中旬、稍多數、昆蟲類を食ふ。

キセキレイ *Motacilla cinerea caspica* (S. G. Gmelin)

五月中旬—十月中旬、少數、昆蟲類を食ふ。

五十雀科 Sittidae

シロハラゴジフカラ *Sitta europaea clara* Stejneger

四季棲息、稍多數、主として昆蟲を食ひ稀に果實、穀物を食ふ。

四十雀科 Paridae

シジフカラ *Parus major minor* Temminck & Schlegel

四季棲息、稍多數、主として昆蟲を食ひ往々雜草の種子及穀物を食ふ。

コガラ *Parus atricapillus restrictus* Hellmayr

四季棲息、稍多數、主として昆蟲食、稀に種子を食ふ。

ヤマガラ *Parus varius varius* Temminck & Schlegel

四季棲息、稍多數、主として昆蟲食、稀に果實を食ふ。

ヒガラ *Parus ater insularis* Hellmayr

四季棲息、多數、主として昆蟲を食ひ、往々種子を啄む。

シマエナガ *Aegithalos caudatus japonicus* Paražík

四季棲息、多數、食餌コガラに同じ。

キクイタダキ *Regulus regulus japonensis* Blakiston

四月中旬に少數を見る。主として昆蟲類を食ふ。

鷦科 Laniidae

モズ *Lanius bucephalus* Temminck & Schlegel

四月—十月、多數、昆蟲類、蛙、小禽類を食ふ。

鶲科 Brachypodidae

エゾヒヨドリ *Microscelis amaurotis hensonii* (Stejneger)

四季棲息、稍多數、植物の實、昆蟲、クモ類を食ふ。

鶲科 Muscicapidae

サメビタキ *Hemicelidon sibirica sibirica* (Gmelin)

極めて少數、昆蟲食。

キビタキ *Zanthopygia narcissina narcissina* (Temminck)

四月一十一月、多數、主として昆蟲食。

オホルリ *Cyanoptila cyanomelana cyanomelana* (Temminck)

五月中旬に見た。少數、昆蟲食。

鶯科 *Sylviidae*

ウグヒス *Horeites cantans cantans* (Temminck & Schlegel)

五月一十一月上旬、稍多數、昆蟲食。

シヲサザイ *Urosphena squameiceps squameiceps* (Swinhoe)

五月中旬に見た。稍多數、昆蟲食。(別名カハリウグヒス、又はヤブサメ)

オホヨシキリ *Acrocephalus stentoreus orientalis* (Temminck & Schlegel)

五月下旬に見た。稍多數、昆蟲食。

鶲科 *Turdidae*

トツグミ *Turdus aureus* Holandre

四月下旬一十月、少數、昆蟲と僅かに樹果を食ふ。

クロツグミ *Turdus cardis* Temminck

五月上旬一十月中旬、稍多數、トツグミと同じ食物。

シロハラ *Turdus pallidus* Gmelin

五月上旬一十一月上旬、少數、食物上に同じ。

マミチヤジナイ *Turdus obscurus obscurus* Gmelin

五月上旬一十一月上旬、稍多數、食物同上。

アカハラ *Turdus chrysolaus chrysolaus* Temminck

五月上旬一十月下旬、稍多數、食物同上。

ツグミ *Turdus eunomus* Temminck

山川氏觀察。

ノビタキ *Saxicola torquata stejnegeri* (Parrot)

五月下旬一十月下旬、多數、昆蟲食。

ルリビタキ *Ianthia cyanura cyanura* (Pallas)

四月下旬に見た。多數(五月中旬より見られない)、昆蟲食。

ノゴマ *Luscinia calliope calliopea* (Pallas)

五月下旬に見た。少數、昆蟲食。

鶲科 *Troglodytidae*

ミソサザイ *Troglodytes troglodytes fumigatus* Temminck

冬期及十一月上旬、多數、昆蟲、クモを食ふ。

燕科 *Hirundinidae*

ツバメ *Hirundo rustica gutturalis* Scopoli

五月下旬一九月下旬、少數、昆蟲食。

怪鷦目 *Caprimulgidae*

ヨタカ *Caprimulgus indicus jotaka* Temminck. & Schlegel.

六月下旬一十月下旬、少數、蛾類、蚊、甲蟲類を食ふ。

翡翠目 *Halcyones*

翡翠科 *Alcedinidae*

カハセミ *Alcedo atthis japonica* Bonaparte

夏期多數、水棲動物。

アカセウビン *Halcyon coromanda major* (Temminck & Schlegel)

四月下旬から現はれる。少數、水棲動物。

啄木鳥目 *Pici*

啄木鳥科 *Picidae*

ヤマゲラ *Picus canus jessoensis* Stejneger

四季棲息、稍多數、昆蟲及びクモを食ふ。

エゾアカゲラ *Dryobates major japonicus* (Seebold)

同上

エゾオホアカゲラ *Dryobates leucotos subcirtis* Stejneger

同 上

エゾコガラ Dryobates kizuki seebohmi (Hargitt)

同 上

クマガラ Dryocopus martius martius (Linnaeus)

四季棲息、少數、昆蟲及びクモを食す。

アリスヒ Jynx torquilla japonica Bonaparte

五月下旬に見た。少數、昆蟲及びクモを食す。

杜鵑目 Cuculi

杜鵑科 Cuculidae

クワクコウ Cuculus canorus telephonus Heine

五月下旬一十月下旬、稍多數、昆蟲特に毛蟲を食す。

ツツドリ Cuculus optatus optatus Gould

同 上

鳴鶲目 Striges

鳴鶲科 Strigidae

オホコノハヅク Otus bakkamoena semitorques Temminck & Schlegel

四季棲息、少數、昆蟲、鼠及び小鳥を食す。

アヲバヅワ Ninox scutulata scutulata (Raffles)

六月下旬に目撃す。少數、昆蟲、小鳥、鼠その他小動物を食す。

鷹鷹目 Accipitres

鷹鷹科 Falconidae

ハイタカ? Accipiter nisus nisosimilis (Tickell)

オホタカ A. gentilis schvedowi (Menzbier) が目下調査中。

トビ Milvus migrans lineatus (Gray)

四季棲息、少數、昆蟲、鼠、魚等を食す。

鶴鷺目 Gressores

鷺科 Ardeidae

アヲサギ Ardea cinerea rectirostris Gould

五月上旬一十月下旬、少數、昆蟲、魚、蛙等を食す。

雁鴨目 Anseres

雁鴨科 Anatidae

マガモ Anas platyrhyncha platyrhyncha Linnaeus

四月一十一月、少數、穀物等を主とした植物性食、往々魚類、ザリガニ、モノアラガヒ等を食す。

コガモ Querquedula crecca crecca (Linnaeus)

同 上

オシドリ Aix galericulata (Linnaeus)

同 上

阿比目 Pygopodes

鷺鷹科 Podicipidae

カイツブリ Podiceps ruficollis japonicus Hartert

同 上

鳩鴿目 Columbae

鳩鴿科 Columbidae

キジバト Streptopelia orientalis orientalis (Latham)

四季棲息、多數、穀物、種子及び木の芽を食す。

アヲバト Sphenocercus sieboldii sieboldii (Temminck)

六月上旬、數羽の群を見たのみ。

鶴目 Limicolae

鶲科 Scolopacidae

ヤマシギ Scolopax rusticola Linnaeus

五月上旬に少數を見た。昆蟲食。

鶴目 Alectorides

秧鶴目 Rallidae

クヒナ Rallus aquaticus indicus Blyth

五月上旬に少數を見た。

鶉鶴目 Galli

松鶴科 Tetraonidae

エゾライテフ Tetrastes bonasia vicinitas Riley

四季棲息、稍多數、木の芽、蕾、筍の筍、種子、果實を食ふ。

雉科 Phasianidae

カウライキジ Phasianus colchicus karpowi Buturlin

雌雄三對を北海道帝國大學農學部附屬博物館より持參して、國有林の北部に當る4林班に放飼した。昭和八年十一月二十五日のことである。その後同年十二月及昭和九年二月と二回に亘り林外に出て農家の納屋に入りしことあり。又同年六月十日造林地内にて凍死したと斷定し得る雄の屍を發見した。恐らく冬の積雪のため越冬困難と思はれる。

鳥類繁殖狀況

野幌國有林内に野生に繁殖する鳥類は、今迄の観察により39種丈であつたが、猶今後多數に上る可く、巢箱中のものに就ては後に記する。

I. 高所に營巢するもの

a. キジバト

可成り早期から營巢繁殖し、未だ林内には残雪が深い頃に抱卵せるものを發見した。巣の高さは

區々で1米から15米位の間に多く營巢して居る。

卵は普通2箇で稀に1箇のものもある。巣材は其の營巢附近の細い枯枝を集め、到つて粗雑で、落葉松林、ヒバ、トド松林内に營巢する。往々巣外に落卵することがあり林内に於て2箇拾得したことがある。



26. キジバトの巣

ヒバの下枝に營巢してゐたものである。

b. ゴジュウカラ

鳩よりは遅いが可成り早期から營巢繁殖する。多く澤に面したカツラ、アサガモ、サハシバ等の大木の穴を開いた中に繁殖する。一般に非常に高く常に15—20米にある。雌雄共に營巢し枯葉の如きものを盛んに運ぶのを見た。自然にある穴に加工するか否かは明かでないが、観察によれば加工されてゐないらしい。穴の方向は皆一様に稍々下向きの所を撰んで居る。

c. トラングミ

潤葉樹林内に營巢する3巣を観察したが、アカイタヤ、トド松の折株、樹種不明であるが矢張り折株上にあり、土臺は水苔を用ひ産座には草の細根、枯葉、シダの枯葉等が用ひられてゐる。卵は4箇で地色が緑がかった青味を呈し薄き褐色斑紋が一様に見られる。巣の測定をして見ると

| | | |
|---------|-------|-----|
| 内 径 | 13厘 | 12厘 |
| 外 径 | 24厘 | 30厘 |
| 深 さ | 5厘 | 5厘 |
| 地上からの高さ | 1.80米 | 10米 |

であり、三者共似通つて居る。

卵の測定は1巣に就て行つたが、

| | | | | |
|-----|------|------|------|------|
| 短 径 | 2.5厘 | 2.4厘 | 2.4厘 | 2.4厘 |
| 長 径 | 3.4厘 | 3.3厘 | 3.5厘 | 3.4厘 |

最後の1卵は巣發見の際、1卵抜き取つて置いたものに追加産卵されたもので斑紋非常に濃く、且

明瞭であつた。巣立には12—14日間を要するもので、2巣からは各々2羽づつ巣立した。



27. トラッグミの巣のある朽木
(中央の人物の向つて左の朽木の頂×)



29. トラッグミの巣
側面から見たところ(中央×)



28. 同上トラッグミの巣を
上から見たところ



30. 同上トラッグミの巣、卵、
雛を真上から見たところ

d. オホタカ? (ハイタカ?)

試験場建物附近林縁から遠くないトド松の幹の曲つてゐるところに營巢してゐる。巣は膨大なもので古巣の上に新しく今年の營巢がなされたものの様で、トド松の枯枝を主として用ひてゐる。産座にはイスガヤを用ひて居り、稍々青味がかつた卵4箇を見た。地上約15米で附近はトド松と潤葉樹の大木の混生林になつて居り、深い澤が三方に入り込み一つの高臺の様な地形を呈してゐる。孵化日数は最後の卵の日（始めに卵ある時に発見し更に後2卵増加された）から數へて56日で、此頃

は皆雛になつてゐるのを見た。巣の附近の警戒及び抱卵は全部雌で、雄は時々巣の上空を回を描いて飛び、姿を直ぐ消す。孵化近くなると雌は妨害者を見れば猛然と襲ひかかる。雛は全身白き綿毛に包まれ、口嘴は灰鉛色を呈してゐる。

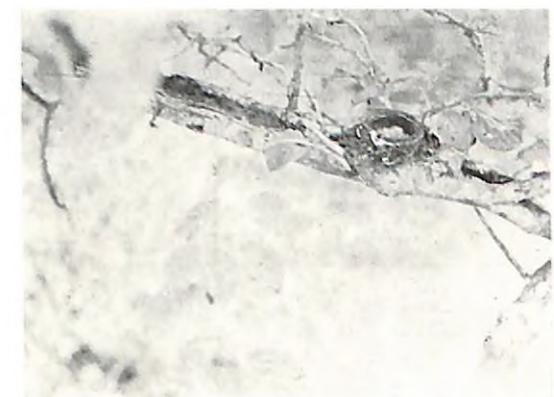
e. クロツグミ



31. オホタカの巣卵

一例は地上20米位の高さでトド松に倒れかゝつ

たシナノ木の二叉になつた所に營巢してゐた。発見した時は、孵化したばかりで、発見の日から約二週間目に巣立した。巣は上臺は水苔で作り、産座には草の細根、トド松の枯葉、潤葉樹の枯葉を用ひて居る。巣の内径は9厘、深さ4厘、外形12厘であつた。4雛で4雛共に巣立した。巣の地上からの高さは區々で1米から20米位まである。発見した所は毎日の如く、人が來て可成り騒々しい所である。山田氏は産卵數5箇を見てゐる。



32. クロツグミの巣雛

f. コガラ



33. 中央トド松の枯木頂
附近のコガラの營巢

巣箱によく營巢するが、それ以外澤の中の枯れたトド松の絶頂附近、地上から10米位の所の洞の中に營巢してゐる。五月中旬に盛んに親の送餌してゐるのを見受けた。コガラは自分で穴を穿つこともあるらしく、盛んに嘴で木を啄き穴を作つて居るのを見た。又コガラの巣跡に營巢する場合もあるらしい。

g. エリアカゲラ

枯木に穴を穿つて營巢する。樹種も多くはトド松であるがサハシバにも營巢して居るのを見た。穴は地上から6—7米位の所に一番多く、地上9米位の所に盛んに營巢してゐるのを観察したことがある。又非常に高い所でも營巢する。個體數も多くこの林内には良く繁殖するらしい。

h. エゾオホアカゲラ

大體エゾアカゲラと同じ様な所に營巢するが、數は前者より少い。

i. エゾコゲラ

34. コゲラの營巢箇所



35. コゲラの巣

割合に營巢場所の發見し難い鳥で、唯一巣を發見したのみである。澤の中の傾斜地にある枯木に營巢し、入口までの高さ（垂直高さ）2.70米、入口の直徑4厘、木の太さ65厘であつた。下地にはチマキザサ、ミズバセウ等が密生し、トド松、潤葉樹の混生林内である。

j. キビタキ

潤葉樹林内で多く營巢するものの如く、唯一巣發見することが出來た。道路傍のトド松の樹皮の間隙に營巢し、地上から160厘の高さである。巣材は外圍には潤葉樹の枯葉を用ひ、産座には草の細根、馬尾毛を用ひて居る。



36. キビタキの巣



37. キビタキの營巢したトド松及び附近

枝の少し上位、樹皮の脱げた箇所

卵の測定をしてみると

| | | | | | | |
|-----|------|-------|------|-------|-------|-------|
| 長 草 | 1.8厘 | 1.8厘 | 1.8厘 | 1.85厘 | 1.8厘 | 1.8厘 |
| 短 径 | 1.4厘 | 1.35厘 | 1.4厘 | 1.35厘 | 1.35厘 | 1.35厘 |

であり、卵は白色地に不判明な型の褐色斑紋が鈍端に多くある。巣は位置の關係上長方形をなして居た。巣は長方形でも産座は圓形で深い橢形をして居り、内徑5.3厘である。

尙ほ巣箱に入ることもありこの時は、5卵で巣は外側即ち土臺には水苔を用ひ、産座には枯草、草の細根が用ひられて居た。

k. ハシボソガラス

トド松又はサハシバの如き比較的大木に營巢する。餘り多く見られない。巣も比較的粗雑で太い枯枝を土臺に用ひて、産座には馬の毛等を用ひてゐる様である。馬の背中に止つて毛を嘴一杯に啄み飛びさるのを目撃した。

l. ト ピ

大木の三叉に多く營巢する。貯水池の邊又は林縁で發見された。巣材には矢張り枯枝を用ひ可成り大きな巣である。2箇あるも共にサハシバの大木の上であつた。

m. シジユウカラ

巣箱に最も良く入るもので、自然に於ては針葉樹林中にある、潤葉樹の裂目等に營巢するらしく、可成り高い所に營巢する。山田氏によれば卵數は9—13箇である。

n. ヤマガラ

大體シジユウカラと同一であるが、ヤマガラは深林中に營巢する性質を有つてゐる。巣箱に入つたものより考察すると、薄暗い密林中に營巢することは確實である。

o. ムクドリ

林縁近くの枯木の穴等に多數營巢繁殖して居る。場所は殆ど所構はず撰んで營巢する様で、高さは一體に高い所を撰ぶ。巣材には、ワラ、雞の羽毛等が主で、比較的粗雑である。巣箱にもよく入る。採餌は主に農耕地で、鋤で土を起してゐる後からついて歩き餌を探して運んで居る。1腹5—6卵で、青味がかつた美麗な卵である。繁殖も長期間行つて居り、造巣を始めるのも早期の方である。

六月下旬になると巢立したものが集り群をなして飛んで居る。

p. コムクドリ

ムクドリよりも稍々後れて營巣繁殖し始める。場所は一般に撰ばないが、多くは木の穴等で、軒、屋根裏、煙突内にも營巣する。巣材も色々で、ワラ、枯草が主である。高さはムクドリも低目の所を好む。卵は5—6卵で青味がかつた卵である。

q. エナガ

澤に面した傾斜地のサハシバの15米位の所の三叉枝に營巣して居り、雄雌で盛に巣材を運んで居るのを見た。他所にて採集したものによると、巣材は蜘蛛の巣で鳥の羽毛又は苔等を綴り合せ、巣穴は縦に細長くなつて居る。非常に美麗なものである。

II. 低地に營巣するもの

a. オホルリ



38. オホルリの營巣箇所
(写真中央のシダの陰)

深い澤の狭まつた所で倒木の水苔で覆はれて居る蔭の土中に營巣されて居た。闊葉樹の非常に密林の爲め暗く土手の中腹の濕つた場所である。巣材は全部水苔で、産座には水苔の花軸を用ひてある。内径5厘、深さ3.5厘で、外輪階圓形をなし22—23厘位の大きさである。3雛と1無精卵とで卵は黄味がかつた白色地をなし斑紋がない。發見したものは古くなつたものであるから明瞭には解らない。短径1.6厘、長径1.9厘である。

b. ヤフサメ (シオサマイ)

傾斜地で、イヌガヤ、シダ、チマキザサ等の密生して居り、落枯葉の厚く積つた所の木の根の隙間等の地上に營巣してゐる。巣は上向きで、大體闊葉樹の枯葉で作られ、蟲により脈文けになつた軟かい枯葉を多く用ひて居る。観察したのはアヲダモの根下に營巣されて居り、6雛で巣の大きさは内径6厘、外径11.6厘である。巣材には尚ほ草の細根、ネズミの毛、兎の毛、水苔等少量用ひら

れて居る。産座には毛糸の如きものが用ひられてゐた。



39. ヤフサメ (シオサマイ) の營巣箇所



40. ヤフサメの巣雛

c. ヤマシギ



41. ヤマシギの巣及卵

チマキ籠の籠の稍々疎な所でトド松林との境に營巣してゐる。下地は乾燥して居り稍々巣の様式をなす粗末なもので、卵は4箇で内1箇は破壊され観察し得たのは3箇である。兩端の差著しく汚褐色地に濃淡の汚褐色斑紋あり鈍端に多い。

| | | | |
|-----|------|------|------|
| 長 径 | 4.5厘 | 4.4厘 | 4.5厘 |
| 短 径 | 3.4厘 | 3.4厘 | 3.4厘 |

巣は殆ど形ばかりで、浅い椀形をなし、枯葉を材料として用ひ、内径1.3厘である。

d. ヨタカ

晝間は林中の暗所に棲み、夕暮に出て食を求める。巣はホホ、ミズナラ、シコロ、メダラ等の密生地でトド松の稚樹が生え下にイヌガヤ、ユツリハ等が混生してゐる所にあつた。巣型は極めて不規則で、殆ど形態を具へず、地上のミズナラの枯葉の上に産卵したと思はれる。六月下旬に巣中に2雛が漸く歩き得る程度に發育してゐたのを發見した。

III. 林縁及び農耕地にて營巣繁殖するもの

a. モズ

灌木林、籠篭等内に營巣する。高さも80cmから2m内外迄で、餘り高所には巣を作らない。卵は

6卵で、綠青色の薄色の地に濃褐色の斑紋あり、鈍端に多い。卵の大いさは、

| | | | |
|-----|--------|--------|--------|
| 長 徑 | 2.5cm | 2.45cm | 2.5cm |
| | 2.45cm | 2.4cm | 2.3cm |
| 短 徑 | 1.85cm | 1.85cm | 1.85cm |
| | 1.85cm | 1.8cm | 1.7cm |

である。

巢材は大體附近にあるものであるが、一例を見ると外巣は落葉松の枝、ツル、ワラ、木の根等を

用ひ、産座には綿、紙、雛の羽毛、枯草、馬尾毛等を用ひて居る。内径は8.5cm、外径1.27cmで深さは4.7cmである。

b. ホホジロ

タウヒの稚樹の下枝に營巣されるのを観察した。地上から50cmの高さの所に營巣し、附近は籠、フキが密生し完全に蔭覆されて居る。巣材は外縁は竹の根、草の根、禾本科植物の枯葉で作られ、内部は草、竹の細根で作られ、馬尾毛を用ひて居る。内径6cm、深さ5.5cm、外径9.5cmである。卵は5箇。

長 徑 2.2cm 2.1cm 2.0cm 2.0cm 2.1cm

短 徑 1.6cm 1.6cm 1.6cm 1.7cm 1.6cm

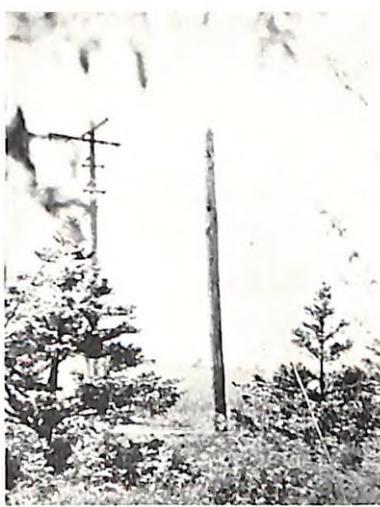


43. ホホジロの巣及び卵

である。

c. アオチ

落葉松の疎林内のフキの下に營巣して居り、發見と同時に6雛が巣立した。巣は産座に馬尾毛を



44. 電柱のスマメの巣

d. スズメ

到る所の農家の納屋、人家の軒、屋根裏等にて營巣繁殖して居る。啄木鳥の開けた電信柱の穴へ營巣して居るものがあつた。

e. ハクセキレイ

畑地で繁殖するもので、農家の屋根等を撰び、一例は農家の肥料小屋の縁に營巣し、4雛で、巣材には外圍に枯葉、蘿を用ひ、産座には馬尾毛を用ひて居た。



45. ハクセキレイの營巣した肥料小屋(×の上部)

f. オホヨシギリ

比較的人家附近の湿地のヨシ又はオニシモツケの密生して居る中に營巣する。地上からの高さは大體一定して居り、80cm前後で三枝を巧みに縫ひ合はせて造巣する。観察したのは籠の密生して居る中に發見したもので地上から80cm、巣材は内部



46. オホヨシギリの巣

には禾本科植物でカモガヤ等が用ひてあり、外部は竹の細根、竹の枯葉、禾本科植物の枯葉、綿を用ひてある。巣の内径は5.5cm、外径8.85—9.5cmである。卵は3箇で、山田氏は4例を見4—5箇の卵を見た。

長 徑 2.1cm 2.0cm 2.1cm

短 徑 1.65cm 1.65cm 1.65cm

g. ホホアカ

畠又は牧草地に營巣産卵する。卵は4箇汚灰色の地に濃褐色の斑紋あり鈍端に多い。雄は常に遠く離れて轉り、巣に近寄らない。巣は草等の根株の蔭に作り、外圍は枯草の茎と細根、竹の枯葉で



47. モ、アカの巣箱

作り、産座には草の細根の上に更に馬尾毛を敷いて居る。卵の大きさは

長 径 1.95厘 1.90厘 1.9厘 1.9厘

短 径 1.6厘 1.6厘 1.6厘 1.5厘

で4箇あつた。

巣は内径6厘、外径9.2厘、深さ5.5厘である。

以上の外に繁殖する事の明かなものは、山田氏

の調査等よりアカセウビン、カハセミ、エゾライテフ、ミヤマカケス、エゾヒヨドリ、ヤマガラ、クマガラ、ヒバリ、アリスイ、アカハラ、ウグヒス等である。

林内に於ける巣箱

野幌林業試験場は昭和六年五月に100箇の人工巣箱を第1、第2、第3、第4、第5、第6林班に、中央道路及び歩道を中心と左右30米以内に架設した。

巣箱の形式、架設状態等は他日機会を見て報告しやうと思ふ。昭和八年十一月と十二月に、更に第1林班内の歩道を中心と澤又は丘陵地の中腹等に50米以内と、第1林班及び第2林班の林縁とに合計45箇を増設した。

49. エゾモ、ンガが嘴み
擴げた巣箱の入口

巣箱は夏期繁殖する鳥類のため興へるが、近時冬期留鳥に利用されることも發見せられたのである。野幌國有林中に於ける巣箱が野鳥の繁殖のため利用された率は13.6%で、猶ほ將來の研究により利用率は林内に繁殖してゐる鳥類の數から見れば相當に高め得ることと思ふ。

余は上記の巣箱に就て、晚秋の巣立後のものと、早春利用前のものと、初夏の利用中のものと三回の観察をなし、目下

尙ほ観察繼續中であるが、今迄の結果を報告すると次の如くである。

第一回調査

昭和八年十一月二十六日より十二月二日に亘り、昭和六年度に架設したものを調査した。架設した樹木の枯倒、風、或は巣箱の腐朽其他のため巣箱の紛失したものは20箇であつた。残り80箇の中13箇中には、エゾモ、ンガが入つてゐた。モ、ンガが入つてゐる巣箱は、筒型のものが多く、その冬籠りのため樹皮、サルオガセ、水苔、枯草等で橢形の巣を作つて中に潜むもので、態々入口を曽み擴げて入つてゐたものもあつた。

第二回調査

昭和九年四月十七日一四月二十一日の間に、前回のものに昭和八年に架設したものと加へて調査した。モ、ンガの入つたもの15箇、留鳥が避寒のため入つた形跡として中に多量の鳥糞の發見されたものは7箇あつた。

第三回調査

昭和九年六月九日一十一日に調査した。この時迄に巣箱を利用して入つた鳥類は、シジュウカラ9箇、ムクドリ4箇、ヤマガラ1箇、キビタキ1箇、モ、ンガ6箇、蜂が入つて巣を作つたもの5箇と營巣準備中のもの數箇あつた。モ、ンガは巣箱の中で仔を産むこともあるらしい。

昭和九年四年には造巣材料として菌類培養に用ひた褐色の綿を林内に撒き給與したが、ヤマガラと外一箇不明の鳥の巣は、産座は悉くこの綿で外の巣にも殆ど全部多少の程度に於てこれを用ひてゐた。一般に營巣材料は産座に綿、モ、ンガの毛、馬尾毛を用ひ、基礎に水苔が多く用ひられる。只キビタキは産座に綿を用ふことなく枯葉の柔軟なもの、細い根、蟬の翅等を用ひてゐた。ハシボソガラス等は林外の農家の馬脊に上り毛を抜き去つて産座に用ひる。

この國有林内の巣箱利用の障害を考察するに、第一に三月下旬の鳥類渡來期に伐採、手入等での出入頻繁のために恐怖をなすことが理由ともなるが、第二にモ、ンガが本國有林中では最も障害をなし、抱卵中又は産卵中途で、モ、ンガの襲撃を受けた形跡のものがあつた。冬期に豫めモ、ンガを驅逐しておいても春再び入るものがある。第三はカラス及びカケスで、特にカラスは一度鳥の入つた巣箱を外から破壊して中を荒すことが屢々あることは他に例を見ない障害である。（昭和九年六月二十九日）

48. 澤に面した斜面中腹
に架設した巣箱

和名索引

ア

- ア イ サ 12
 アチダイシヤウ 7
 アカセウビン 3, 19, 32
 アカハラ 14, 18, 32
 アトリ 13, 16
 阿比目 21
 アマガヘル 6
 アリスヒ 20, 32
 アチサギ 21
 アチヂ 11, 14, 16, 30
 アチバト 21
 アチバヅク 20

イ

- イカル 15
 イスカ 16
 イタチ 10
 イトヨ 4

ウ

- 鶯科 18
 ウグヒス 18, 32
 鶴雞目 22
 ウソ 16

エ

- エゾアカガヘル 6
 エゾアカゲラ 13, 19, 25
 エゾイタチ 11
 エゾオホアカゲラ 13, 14, 19, 26
 エゾコゲラ 13, 20, 26
 エゾサンセウウチ 5
 エゾタヌキ 10
 エゾトガリネズミ 10
 エゾトミヨ 5
 エゾドザヨオ 4
 エゾノウサギ 9
 エゾハシブトガラス 15

- エゾヒメネズミ 8
 エゾヒヨドリ 13, 17
 エゾモモンガ 9, 33
 エゾヤチネズミ 8
 エゾリス 9
 エゾライテフ 22, 32
 エナガ 28
 燕雀目 15

オ

- オシドリ 12, 21
 オホカハラヒツ 15
 オホコノハヅク 20
 オホタカ 20, 24
 オホヨシキリ 12, 18, 31
 オホルリ 18, 28

カ

- 鶲鷹科 21
 カイツブリ 12, 21
 カウライキジ 22
 カケス 13
 カナヘビ 6
 翠翠目 19
 翠翠科 19
 カバセミ 13, 19
 カハラヒツ 32
 鶴科 15
 カラス 33
 雁鴨目 21
 雁鴨科 21

キ

- キクイタダキ 17
 キセキレイ 16
 雄科 22
 キジバト 13, 14, 21, 22
 啄木鳥目 19
 啄木鳥科 19
 キツネ 10

魚類 3
キビタキ 17, 26, 33

ク

秧雞目 22
クヒナ 22
熊 7
クマゲラ 20, 32
クワクワウ 20
クロツグミ 18, 25

コ

コエゾイタチ 11
コガモ 12, 21
コガラ 13, 17, 25
五十雀科 17
ゴジュウカラ 23
コムクドリ 15, 28
鶴鶲目 20

サ

鶲科 20
サメビタキ 17

シ

鶴目 21
鶴科 21
四十雀科 17
シジュウカラ 13, 17, 27
シマヘビ 7
シマエナガ 13, 17
シメ 13, 15
シロハラ 18
シロハラゴジュウカラ 13, 17, 33
シチザザイ 18, 28

ス

雀科 15
スマメ 13, 16, 31
スナヤツメ 3

セ

鶴鶲科 16
セグロセキレイ 13

チ

鳥類 11
鳥類繁殖状況 22
ヤムグリ 7

ツ

鶲科 18
ツグミ 13, 18
ツツドリ 20
燕科 19
ツバメ 19
鶴目 22

ト

トカゲ 6
トビ 13, 20, 27
ドブネズミ 8
トラツグミ 14, 18, 23

ノ

ノコマ 18
ノビタキ 18

ハ

鳩鶴目 21
鳩鶴科 21
ハイタカ 20, 24
ハクセキレイ 16, 31
ハシボソガラス 13, 15, 27
爬蟲類 6
ハツカネズミ 8

ヒ

ヒガラ 13, 17
鶲科 17
ヒタキ 11
雲雀科 16
ヒバリ 16, 32
ビンズイ 16
ヒツワ 13
鶴科 17

フ

梟鶲目 20
梟鶲科 20
フクロウ 13
フクドアヨオ 4
フナ 4

ヘ

ベニマシコ 16

ホ

杜鵑目 20
杜鵑科 20
ホホジロ 14, 16, 30
ホホアカ 16, 31
哺乳類 7

マ

マガモ 12, 21
マシコ 11
マヒソ 11, 13, 15
マミチヤジナイ 18
マムシ 7

ミ

鷹鶲科 19
ミソサザイ 13, 19
ミヤマカケス 13, 15, 32

ム

椋鳥科 15
ムクドリ 13, 15, 27, 33

モ

鶲科 17
モズ 17, 30

ヤ

ヤブサメ 28
ヤマガラ 13, 19, 27, 33
ヤマゲラ 13, 19, 32
ヤマシヤ 22, 29

ヨ

怪鶲目 19
怪鶲科 19
ヨタカ 19, 29

ラ

松鶲科 22

リ

兩棲類 5

ル

カリビタキ 18

ワ

鷺鷹目 20
鷺鷹科 20

學名索引

A

| | |
|--|----|
| Accipitres | 20 |
| Accipiter gentilis schvedowi | 20 |
| Accipiter nisus nisosimilis | 20 |
| Acrocephalus stentoreus orientalis | 18 |
| Aegithalos caudatus japonicus | 17 |
| Alaudidae | 16 |
| Alauda arvensis japonica | 16 |
| Alcedinidae | 19 |
| Alcedo atthis japonica | 19 |
| Alectorides | 22 |
| Anatidae | 21 |
| Anas platyrhyncha platyrhyncha | 21 |
| Anseres | 21 |
| Anthus hodgsoni berezowskii | 16 |
| Ancistrodon blomhoffii | 7 |
| Apodemus geisha hokkaidi | 8 |
| Ardeidae | 21 |
| Ardea cinerea rectirostris | 21 |
| Aix galericulata | 21 |

B

| | |
|----------------------------|----|
| Brachypodidae | 17 |
|----------------------------|----|

C

| | |
|---|----|
| Carassius auratus | 4 |
| Carduelis spinus | 15 |
| Caprimulg | 19 |
| Caprimulgidae | 19 |
| Caprimulgus indicus jotaka | 19 |
| Chloris sinica kawarabia | 15 |
| Clethrionomys rufocanarus bedfordiae | 8 |
| Cuculi | 20 |
| Cuculidae | 20 |
| Cuculus canorus telephonus | 20 |
| Cuculus optatus optatus | 20 |
| Coccothraustes coccothraustes japonicus | 15 |
| Columbae | 21 |
| Columbidae | 21 |

| | |
|--|----|
| Corvidae | 15 |
| Corvus corone corone | 15 |
| Corvus coronoides japonensis | 15 |
| Cyanoptila cyanomelana cyanomelana | 18 |

D

| | |
|--------------------------------------|----|
| Dryobates kizuki seeboldii | 20 |
| Dryobates leucotos subcitrinus | 19 |
| Dryobates major japonicus | 19 |
| Dryocopus martius martius | 20 |

E

| | |
|---------------------------------------|----|
| Elaphe climacophora | 7 |
| Elaphe conspicillata | 7 |
| Elaphe quadrivirgata | 7 |
| Emberiza cioides ciopsis | 16 |
| Emberiza fucata fucata | 16 |
| Emberiza spodocephala personata | 16 |
| Eophona personata personata | 15 |
| Eumeces laticentatus | 7 |

F

| | |
|--------------------------------|----|
| Falconidae | 20 |
| Fringillidae | 15 |
| Fringilla montifringilla | 16 |

G

| | |
|---|----|
| Galli | 22 |
| Garrulus glandarius pallidifrons | 15 |
| Gasterosteus aculeatus aculeatus | 4 |
| Gressores | 21 |

H

| | |
|--------------------------------------|----|
| Haleyon | 19 |
| Halcyon coromanda major | 19 |
| Hemichelidon sibirica sibirica | 17 |
| Hirundinidae | 19 |
| Hirundo rustica gutturalis | 19 |
| Horeites cantans cantans | 18 |
| Hyla arborea japonica | 6 |

| | |
|----------------------------------|---|
| Hynobius retardatus | 5 |
|----------------------------------|---|

I

| | |
|-------------------------------|----|
| Ianthia cyanura cyanura | 18 |
|-------------------------------|----|

J

| | |
|-------------------------------|----|
| Jynx torquilla japonica | 20 |
|-------------------------------|----|

L

| | |
|-----------------------------------|----|
| Lampetra mitsukurii | 3 |
| Laniidae | 17 |
| Ianus bucephalus | 17 |
| Lefua nikonis | 4 |
| Lepus ainu | 9 |
| Limicolae | 21 |
| Loxia curvirostra japonica | 16 |
| Luscinia calliope calliopea | 18 |

M

| | |
|--------------------------------------|----|
| Milvus migrans lineatus | 20 |
| Microscelis amaurotis hensonii | 17 |
| Motacillidae | 16 |
| Motacilla alba lugens | 16 |
| Motacilla cinerea caspica | 16 |
| Mus molossinus | 8 |
| Muscicapidae | 17 |
| Mustela erminea kanei | 11 |
| Mustela itatsi itatsi | 10 |
| Mustela rixosa namiyei | 11 |

N

| | |
|---------------------------------|----|
| Ninox scutulata scutulata | 20 |
| Nyctereutes albus | 10 |

O

| | |
|-----------------------------------|----|
| Oreias oreas | 4 |
| Otus bakkamoena semitorques | 20 |

P

| | |
|-------------------------------------|----|
| Passeres | 15 |
| Passer montanus saturatus | 16 |
| Paridae | 17 |
| Parus ater insularis | 17 |
| Parus atricapillus restrictus | 17 |

| | |
|--------------------------------------|----|
| Parus major minor | 17 |
| Parus varius varius | 17 |
| Phasianidae | 22 |
| Phasianus colchicus karpowi | 22 |
| Pici | 19 |
| Picidae | 19 |
| Picus canus jessoensis | 19 |
| Podicipididae | 21 |
| Podiceps ruficollis japonicus | 21 |
| Puungitius tymensis | 5 |
| Purhula pyrrhura griseiventris | 16 |
| Fygopcdes | 21 |

Q

| | |
|---------------------------------|----|
| Querquedula crecca crecca | 21 |
|---------------------------------|----|

R

| | |
|----------------------------------|----|
| Rallidae | 22 |
| Rallus aquaticus indicus | 22 |
| Rana temporaria | 6 |
| Rattus norvegicus | 8 |
| Regulus regulus japonensis | 17 |

S

| | |
|--|----|
| Saxicola torquata stejnegeri | 18 |
| Sciurus vulgaris orientalis | 9 |
| Sciuropterus russicus orii | 9 |
| Scolopacidae | 22 |
| Scolopax rusticola | 22 |

| | |
|--|----|
| Sittidae | 17 |
| Sitta europaea clara | 17 |
| Sorex shinto saevus | 10 |
| Sphenocercus sieboldii sieboldii | 21 |
| Spodiopsar cineraceus | 15 |
| Streptopelia orientalis orientalis | 21 |

| | |
|------------------------|----|
| Striges | 20 |
| Strigidae | 20 |

| | |
|----------------------------|----|
| Sturnidae | 15 |
| Sturnia philippensis | 15 |

| | |
|------------------------|----|
| Sylviidae | 18 |
|------------------------|----|

T

| | |
|---------------------------------|----|
| Takydromus tachydromoides | 6 |
| Tetraonidae | 22 |

| | |
|-----------------------------------|----|
| Tetrastes bonasia vicinias | 22 |
| Troglodytidae | 19 |
| Troglodytes troglodytes fumigatus | 19 |
| Turdidae | 18 |
| Turdus aureus | 18 |
| Turdus cardis cardis | 18 |
| Turdus chrysolaus chrysolaus | 18 |
| Turdus eunomus | 18 |
| Turdus obscurus obscurus | 18 |
| Turdus pallidus | 18 |

U

| | |
|-----------------------------------|----|
| Uragup sibiricus sanguinolentus | 16 |
| Urosdhena squameiceps squameiceps | 18 |

V

| | |
|------------------|----|
| Vulpes japonicus | 10 |
|------------------|----|

Z

| | |
|-----------------------------------|----|
| Zanthopygia narcissina narcissina | 17 |
|-----------------------------------|----|

昭和九年七月十三日印刷

昭和九年七月十五日發行

北海道林業試驗場

印 刷 者 山 中 次 郎
札幌市北一條西三丁目二番地

印 刷 所 合名會社文榮堂印刷所
札幌市北一條西三丁目二番地